

奨励賞

清瀬市立清瀬第二中学校 三年 山田 倫太郎

障害と生きること

僕はいつも疑問に思う。「障がい者も自分たちと同じ人間。なのにどうして何も障害のない健常者は、障がい者のことを受け入れられず、まるで人間ではないというような差別的な扱いをしてしまうんだろう。」と。

みなさんは以前、相模原で起きた残酷な殺人事件を覚えているだろうか。あのとき標的となったのが、障がい者だ。この事件で犯人が「障がい者などこの世にいない。」と言っていたのが、今でも僕の心に深く刻まれている。この事件以来、僕は障がい者に対してより深く考えるようになった。障がいを抱えてしまったらもう生きている意味はないのか？障がい者も自分たちと同じ「人間」なのに、普通の人より少し不自由や難があるだけなのに、どうしてここまで酷い差別を受けなければならないのか？と。障がい者に対する虐待などのニュースを観る度に、そんなことを思う。

僕の母は、障がい者施設の看護師として働いている。母はよく、障害を抱えながら施設で生活している人の話を聞かせてくれる。その中で僕が一番印象に残っているのは、こんな話だった。「始めは何を言っているのか分からなかったことが、過ごす時間を重ねる度に理解できるようになって嬉しい」と言っていたことだ。きっとその人の性格、仕草、くせなど、様々な要素に真剣な目を向け、「分かりたい」という思いが理解することにつながっていくのだと思った。そして僕は、母が日々どの様な障害を抱えた人と接しているのか、興味をもった。今、日本にいる障がい者の数はおよそ三百五十万人。その中で主に、身体障害、知的障害、精神障害の三つに分類されるということがわかった。僕はさらに、障がいをもった人のことについてもっと詳しく知りたい、理解したいと思い、父と一緒に母が働いている施設のお祭りに行ってみた。すると、僕が行く前にイメージしていた暗い雰囲気などどこにもなく、驚くほどに活気があり、施設内は明るさに包まれていた。そして、みんなが笑顔で溢れていた。この施設には、重い障害を抱えた方も大勢いる。そんな中で、生きることが辛そうな、苦

しそうな人の姿などどこにもなかった。むしろ、楽しそうに、幸せそうに生きていたのがとても印象的だった。僕はここで、改めて生きることの大切さやありがたみを教えてもらうことができた。

もうひとつ僕の身近で、障害というキーワードにつながる人がいる。父の親戚で、三十歳で子供も三人いる。その人は、ある日突然手にガンを患い、左手首からの切断を余儀なくされた。こうして、一瞬にして健常者から障がい者という立場に変わってしまった。手術を終え、僕は父と母と一緒にお見舞いに行った。まだ手術後からあまり時間が経っていないためか、あまり元気のないように見えた。それから何年か経って、親戚の葬儀で再会した。左手には義手をつけ、僕の母と明るく会話を交わしていた。今では運転もできる、掃除、洗濯、料理などの家事もこなし、もちろん、子育てもする。そして、社会に出て、フルタイムで働いている。彼女がここまでどれだけの恐怖や悲しみ、苦労や困難を乗り越えてきたかは計り知れない。しかし彼女には、それを乗り越えた分の「強さ」があった。そして、こんな中でも懸命に生きようという前向きな姿勢に、強く心を打たれた。

障害は、生まれつきのもものと、突然そうになってしまうものがある。色んな恐怖や苦しみ悲しみと向き合うことになるだろう。でも、障害を抱えたからといって不幸になるわけではない。障害者施設の人、父親の親戚の人、みんな笑顔で、元気で、明るかった。そして、幸せそうだった。僕は、そんな障がい者の方たちから、生きる力とはどういうものなのかを教えてもらった気がする。

このような経験を通して僕が学んだことは二つある。一つは、相手の立場に立って考えることだ。自分自身、いつその立場になるかなんてわからない。だから、自分が障がい者の立場に立ったら、どうしてほしいか、実際に相手の立場になって考えてみることで、障がい者と、普通に、一人の人間として接することができるだろう。また、障がい者を「助けてあげる」という傲慢さはいらないのかもしれない。少しでも寄り添い、支え合っていくことで、差別もなくなっていくのではないかと思った。二つめは、今、この瞬間を大切に、感謝すること。今現在も、何らかの問題や不自由を抱えながら生活している人は大勢いる。そんな中で今僕は、何不自由ない当たり前の生活が送れている。そのことに心から感謝すること。そして、一瞬一瞬を大切に過ごすこと。普段忘れがちなのようなことを、障害について触れたことで再認識することができた。これからも、ここで学んだことを意識して生活していきたい。